

〈事例研究〉

不登校の小学生女兒への家庭訪問相談

Two-year process of counseling visit for a non-attending student in elementary school

長 田 道¹⁾

NAGATA, Michi

要旨

本稿は、不登校の小学生女兒をスクールカウンセラーとして家庭訪問を行った2年間の過程を報告したものである。本児童は幼少期より消極的、受け身的な適応姿勢を続けていたが、周囲の子ども達が前思春期を迎え、密接な仲間関係を築き始めたことからその在り方が行き詰り、学校生活から退避したと考えられた。その背景要因として、本児の家族が社会との交流を避け、殻に閉じこもったような生活をしていた一方で、家族間には境界がなく未分化な状態であったため、本児の前思春期の歩みを支えるには脆弱であったことが考えられた。本児の家族のように閉塞した家庭には、家族以外の他者の存在が大きな意味を持ち、スクールカウンセラーは重要な役割を果たしうる。また、不登校の子どもや家族は積極的に支援を模索する力が不足している場合が多く、支援者が家庭に向くことが有効である。その際には、明確な面接構造を保つことが、「安定した他者」として機能することを可能にする。この事例でも、スクールカウンセラーが安定した面接構造を設定したことで、本児にとっての「安定した他者」として存在することを可能にし、本児が家族と分離し、自己の確立に向かう前思春期の成長の過程を支えた。

キーワード：スクールカウンセラー、不登校、家庭訪問、前思春期、安定した他者

I. はじめに

不登校という言葉は日本には1960年前後に紹介されたとされる。1970年代に入ると、不登校の子どもが増加し始め、2000年前後に爆発的に増加し、現在は12万人前後で推移している（文部科学省、2018）。不登校のケースでは、本人が家の外に出ることや、相談の場に現れることが難しく、援助者側からの一歩踏み込んだアプローチが有効な場合が多い。2003年に文部科学省で出された報告書「今後の不登校

への対応の在り方について」でも、不登校の子どもが増加する中、「ひきこもりがちな不登校児童生徒や保護者に対し、必要な配慮の下、訪問型の支援を積極的に推進することが期待される」と記された。今日では、不登校の児童生徒を学校が積極的に訪ね、状況の改善を模索することが望まれている。その中で、スクールカウンセラーも家庭訪問を行う機会が増えている。それにともない多くの実践報告や研究がなされている（e.g., 本多, 2014; 岩倉, 2003; 小野, 2017; 徳田, 2015）。例えば、田嶋（2001）は援助者による家庭訪問が不登校への有効な手段とし、それをスクールカウンセラーが実践する際のメリットや注意点を報告している。しかし、

¹⁾ 近畿大学 メディカルサポートセンター
Kindai University, Medical Support Center

依然として多くの子ども達が不登校となっている現状では、スクールカウンセラーの家庭訪問についてより有効的な支援法を模索、構築することが必要だと思われる。本稿では、スクールカウンセラーの2年に渡る不登校の女子児童への家庭訪問相談の過程を振り返り、検討を行うことを通して、スクールカウンセラーの家庭訪問の意義について考察したい。

Ⅱ. 事 例

クライアント：小学5年女児 A（10歳）

主訴：何となく学校に行けない

家族構成：本児，母親（以下，B）40歳代，
祖父70歳代，祖母70歳代

面接までの経緯：

X-1年11月、保健室登校をしていた小学5年の児童の面接のために、筆者（以下、SC）がスクールカウンセラーとして小学校の保健室を訪問した際に、欠席が増え始め、保健室で過ごしていたA（当時4年生）と初めて顔を合わせた。その時間は予定していた5年生の児童とAに対し、SCが持参した宮沢賢治の「注文の多い料理店」を読み聞かせた。3学期に入ってからAの欠席が更に増えたため、BよりAへのカウンセリング依頼があった。その際にBは「以前、保健室で読んでもらった本が凄く面白かった。その時の先生なら会ってもいいとAが言っている」と述べた。しかし、Aは既に保健室登校もできなくなっていたため、面接の設定が上手くできないまま3学期は終了した。5年生に進級したX年4月から、週に一度の家庭訪問を開始した。その後、小学校を卒業するまでの2年間、計70回、約50分/回の家庭訪問を行った。

家族背景・生育歴：

祖父母は地方都市出身。Bもその土地で出生し、学齢期までそこに暮らした。その後、現在の居住地に移り、高校を卒業した。卒業後、B

は何かしらの仕事には就いていたが、そのどれもがパートやアルバイトなどといった、非正規の不安定な就労状況であった。30歳代半ばで未婚のままAを出産。出産後数年は多少なりともAの父親との交流があったようだが、初回面接時には連絡が途絶えていた。Aは幼少期より大人しい子どもで同性の友達数人と静かに遊んでいるタイプだったが、発達などの課題を指摘されたことはなかった。小学校入学後は、男子児童にからかわれ泣いてしまうことが数度あったが、大きな問題はなく成長した。しかし、4年生の中頃より少しずつ登校しぶりが始まった。不登校の直接のきっかけになるようなエピソードはなく、本人も「何となく行けなくなった」と語った。Aの不登校をきっかけに、Bはそれまでしていたパートの仕事（内容は不明）を週に一度のチラシ配りに切り替え、Aと過ごす時間を増やした。祖父も仕事に就いておらず、一家の大黒柱は、泊まり込みの仕事をして年に数回帰省する祖母であった。初回訪問時は、1階に6畳2間、2階に6畳2間の光のささない長屋のような家に3人が一日中顔を突き合わせている状態だった。

Ⅲ. 事例の面接経過（X年4月～X+2年3月（全70回））

当時、SCはある市の公立中学校に1年に35回の勤務契約で配置されていた。基本的に中学校で活動し、中学校区内の小学校も担当校であったため、必要に応じて小学校を訪問する形で相談活動を行っていた。Aの担任教諭は多忙のため、SCとの連絡役は小学校の養護教諭が担っていた。A宅への訪問前に養護教諭からは①大人しい子どもであること②母子家庭であること③担任教諭は不定期に家庭訪問しているがAにあまり会えていないこと④担任教諭も不登校の原因がわからないこと、が伝えられていた。

第一期（1回目～13回目：X年4月～7月）

SCとの関係作りの時期

4月半ばの初回面接時、SCが4軒が連なる2階建ての長屋風の家を訪問すると、Bが出迎えてくれた。狭い玄関があり、玄関を入るとすぐに小さな台所と6畳ほどの居間があった。居間には大きなテレビとこたつがあり、綿入れを着た祖父が座ってタバコを吸っていた。SCを見ると祖父は頭を下げた。その脇を通り、居間の奥にあるAの部屋に通された。Aの部屋も6畳ほどで居間とはすりガラス戸で区切られ、一方の壁側は勉強机とベッドが配置されて、女の子らしい小物がたくさん置かれていた。もう一方の壁側には家族のものと思われるタンスや荷物がぎっしり置かれていた。部屋の奥はトイレと風呂に繋がっており、Aの部屋は家族の生活通路となっていた。ベッドの横の狭いスペースは、昼間は小さな折り畳みのテーブルが置かれ、夜はBが布団を敷いて寝るとのことであった。初回の訪問から数回は、Bが同席した。未婚のまま出産したことやAの父親との没交渉、同居する祖父への不満などをAの前で赤裸々に語り、Aは黙ってそれを聞いていた。Aはそうした話を初めて聞いたという様子はなく、そのことからBは度々Aの前でその話をしていることがうかがえた。初期の数回の面接では、Aは殆ど話をしなかった。SCが質問を投げかけても、恥ずかしそうにBを見、Bが質問に答えた。音楽を聞くと言うので、好きな歌手を聞くと、「松田聖子」「青いサンゴ礁」と小さな声で答えた。Bがすかさず、「私がずっと好きなんです」と続けた。

初回の家庭訪問後、SCはAの家族全体に境界がなく混然とし、外の世界との交流を避け殻に閉じこもった状態であるように感じ、Aの問題の背景には家族の状況が大きく影響していると考えた。当面の目標として定期的に家庭訪問を続けAとの関係構築を目指すことにし、長期的には、SCとの関係を土台に、Aの自己表

現やコミュニケーション力を育てることと、学校とのつながりと再構築することを目標にした。また、無口なAに無理に話をさせることは逆効果であると考え、Aとつながりを作る手段として、工作や手芸、ゲームなどを持参することにした。結局、最後の訪問まで何か手作業やゲームをしながら話をするという形が続いた。

この期の前半、Aは常にSCにもBにも気を使い、自分の意思を示すことは稀であった。言葉が出にくく、「あのね…」と話し始めても言葉に詰まり、Bがいない場でも最後には「お母さんに聞いて」と述べた。A自身の気持ちでさえも「お母さんに聞いて」と述べることがあった。工作などの手作業をした折には、細部まで完璧を目指し、上手くできない時はひどく落胆した。また、できそうにないと判断した時には最初から手を出さないこともあった。6月に入っても（#8）登校ができない状態は続いたが、SCとは時折小声ながらたわいのない会話をするようになっていった。その頃、自宅を訪れる担任教諭に市の適応指導教室を勧められた。当時のAにとって担任教諭は不定期にやってきて、登校を促したり勉強を勧めたりする存在で、この件についても「嫌なことを言いに来た」と述べた。SCは「一度だけ行ってみよう」と強めに勧めた。Aは知らない場所に行くことに抵抗を示したが、何回かにわたり（#8-10）話し合いをし、結局 半日だけBと見学に行くことを決めた。見学に行った際に、適応指導教室の先生に継続通室を勧められ、「断れなかったので」週に一度、Bと通室することになった。その後すぐに夏休みとなった。

第二期（14回目～26回目：X年9月～12月）

家の外と関わり始めた時期

2学期になってもAは登校できないままであった。SCの家庭訪問は続き、週に一度の適応指導教室への通室も続けられた。10月半ば

には（#19）遠足に参加するかどうか話題になり、行きたいけど行きたくない、相反する思いを口にした。その遠足は近所に住む幼馴染の同級生女兒Cが迎えに来てくれて参加することができた。その頃から、Cが週に何度かAの家に遊びに来るようになった。Cは母親と二人暮らしで、母親が仕事に行くと週末も一人で過ごすことが多い子どもで、Aの家はCにとっても居場所となっているようであった。11月半ば頃（#21）に適応指導教室に「何となく」毎日行き始めた。また、教室に来ている他校の生徒・児童とも積極的に関わり始めた。2学期の終業式は、他児童が帰宅した後Cと学校に通知表を取りに行った。

第三期（27回目～48回目：X+1年1月～X+1年7月）周囲が変化した時期

3学期に入ってから（#27）、Aの言葉数が急激に増え、家庭訪問中に軽口を叩くようになった。また、毎回行っている手作業やゲームに対して「〇〇がしたい」とリクエストするようになった。SCが持参したものが気に入らない場合は、「やりたくない」と拒否したり、苦手な作業を「やって」とSCにやらせる場面も散見し始めた。3月（#32）、「何となく行きたくなかった」と、前触れもなく週に一度保健室に登校し始めた。その直後、Bはチラシ配りの仕事の出勤日を増やし、祖父はアルバイトを見つけて週に数回働きに出るようになった。年度末、小学校の管理職、担任教諭、養護教諭、適応指導教室の先生、SCでケース会議を行った。Aが登校の兆しを見せたことだけでなく、子どもらしいしぐさが増え、表情が明るくなっている現状を共有し、次年度もゆっくりと登校を促す方針で意見が一致した。

6年生に進級した後も適応指導教室に通いながら、週に1、2回、保健室に登校した。この時期になるとAは適応指導教室や保健室に登校する際も、自ら予定を決め、Bに送迎を依頼するようになった。（児童のため指導教室には

保護者の送迎が必要であった。）5月にあった遠足は迷いながらも、Cに家まで迎えに来るように自ら頼み参加した。夏休み直前（#44）、A一家は近所のアパートに引っ越した。以前と同じような長屋作りであったが、間取りが増えた。新居では、1階は台所と祖父母の部屋、2階はA親子の部屋とはっきりと居住空間が分けられた。Aは2階の奥の大きめの窓がある部屋を個室として与えられ、ふすまを隔てた隣の部屋がBの部屋となった。SCが「いい部屋だね」と言うと、Aはにっこり笑い「明るい」と言った。同じ頃、AはC経由でBUMP OF CHICKENを知った。BUMP OF CHICKENは30歳代の男性4人で構成されたロックバンドで、ファン層は10歳代から20歳代が中心とされている。Aは、その後急速にそのバンドにのめり込んでいった。

第四期（49回目～70回目：X+1年7月～X+2年3月）自分を表現し始めた時期

2学期に入ってから、適応指導教室と週に1、2回保健室登校をする状態が続いた。10月にあった修学旅行は迷いに迷い、直前まで抵抗を見せながらも自ら準備を行い、参加した。学校側の配慮で寝る部屋は養護教諭用の部屋でも良いということになっていたが、結局、2日間クラスで分けた班で過ごした。その直後の面接（#53）では、さっぱりした顔で楽しかったと言い、SCに小さなお土産をくれた。11月末（#59）、毎週のように遊んでいたCに「意地悪を言われて喧嘩した」と報告があった。詳細を聞くと、遊びの延長でからかわれたことが分かった。Cに悪気があったとは思えなかったが、Aは「もう2度とCの顔を見たくない」とSCの前でも憤りを隠さなかった。二人は2週間ほどで仲直りをした。

3学期になっても週に1、2回の保健室登校が続いた。SCは年度末でその中学校での勤務期限を迎えるため、Aの家庭訪問も3月末に終了することとなった。そのことを伝えるとAは

「中学生になるしね」と述べた（#63）。3月の面接（#68-69）は小学校の卒業式の話が中心であった。Aは「皆から見られるのが嫌だから出たくない」と繰り返した。実際には事前練習回数と式当日に参加できた。最終回（#70）では「卒業式には出られた。中学校は嫌でないけど、ずっと教室に居られるとは思えない」と述べた。SCが「自分のペースでいいんだよ」と言うと「分かっている」と返した。最後は親子揃って玄関の外まで見送ってくれた。

中学進学後：

家庭訪問終了後、Aから時折近況を知らせる手紙が届いた。また、折に触れAの進学した中学校の教諭がAの近況を知らせてくれた。Aは入学直後の数日は教室に行ったものの、直ぐに校内に設置されていた不登校の生徒用の教室に登校するようになった。1～2年生の間はほぼ毎日その教室に登校した。3年生に進級後、自分の教室で授業を受け始めた。時折、担任の教員に泣きながらしんどさを訴えることがあったもののほぼ欠席することなく卒業を迎えた。中学校進学後もBUMP OF CHICKENのファンは続き、彼らの曲をギターで弾きたいと音楽教室に自ら通い始め、年に一度の音楽発表会にも出演した。また、東京まで母親とBUMP OF CHICKENのライブに行った。中学卒業後は自宅近くの高校に進学し、吹奏楽部に入部して休むことなく通学できた。

IV. 考 察

1. Aの不登校について

齋藤（2016）は不登校を①過剰適応型②受動型③受動攻撃型④衝動型⑤混合型の5つに分類し、その臨床的特徴について述べている。受動型不登校は「前思春期に入り急激に体が大きく荒々しくなって来た仲間集団や、それに対応して厳しい指導や生活管理が行われるようになっていく学校の雰囲気」に圧倒され、登校拒

否に陥ったと理解できる」群である。Aは幼少期より、大人しく静かに遊んでいる子どもであった。受動型の子どもの「幼いころから受け身的・消極的な姿勢が続いているものが多く、そのため自己像は低く自信に乏しい」（齋藤、2016）という特徴と一致する。また、「家族の言う通りに行動している」「友達の間では主導権を相手に渡す」「自分の意見を積極的に言わない」「とにかく注目される事を避ける」等の特徴（齋藤、2013）にも一致点が多い。以上のことから、Aは受動型不登校に分類されると言える。Aは大人しく主張のない子どもとして、小学校3～4年生までは周囲の環境にそれなりに適応し、過ごしていたと思われる。しかし、4～5年生になり周囲の子ども達が前思春期を迎え変化を始めると、自己主張をしないことで周囲との軋轢を避けるこれまでのあり方が破たんし、学校生活から退避したと考える。

Aが周囲の子供たちの変化についていけなかった背景にはAの家庭状況が影響していると考えられる。前思春期の子ども達の大きな課題は親から自立し、自己を確立し、社会に出る準備をすることである。滝川（2017）は、子ども達が安心して外に向かうためには、安心できる家が必要である。そのため家は「ベースキャンプ」として機能しなければならない。そのベースキャンプが社会から孤立しては安全基地として機能を果たせないと述べている。しかし、Aの家庭は停滞し、子どもを社会に押し出す力が非常に乏しかった。A一家の大黒柱はAの祖母であり、BもAの祖父も経済的にも生活面でもAの祖母に依存し、家の中に閉じこもり、社会化されていない生活を営んでいた。また、BはAやSCにまで実父の愚痴を吐き出していたが、そういう自分を振り返るような様子やそれらの行為がAに与える影響への洞察はなかった。家庭訪問時に観察できた家の中の様子が表していた様に、A一家は家族の間にしっかりした境界がなく、物理的にも心理的にも未

分化で依存し合っていた。それはAが母親から自立し、自己を確立する前思春期の課題に向き合うには大変脆弱な環境であったと言える。前思春期は子ども同士が強く結びつくことで、心理的親離れが助けられるとされる（齋藤, 2016）。学校はそういった同じ課題を共有するものが、親密に交流する重要な場となる（滝川, 2017）。小学校の高学年にさしかかり、Aの同級生達は前思春期特有の密接した仲間関係の形成を始めていたと思われるが、Aの成長は足踏み状態だった。学校でAが成長を始めた同級生達に文字通り圧倒され、孤立化していったことは想像にかたくないと思われる。

2. 面接の流れ

第一期のAは自分の気持ちさえ母親に問うほどに、Bと一体化していた。また、面接中見せた些細な失敗への恐れや自己主張を避ける受け身で消極的な態度は、これまでのAの外の世界との適応方法であった。SCが家庭訪問を開始し、2人きりで過ごす時間ができたことで、Aは家族と離れた時間と空間を持つようになった。家族との分離の一步を踏み出したと考えられるだろう。第一期の終わりには、適応指導教室の話が持ち上がる。SCは少しでも家以外の世界に触れることがAにとって必要だと感じると共に、不安感が強く完璧を目指しがちなAには「試してみる」経験が有効だと感じ、それまでのAのペースを尊重する方法から一転し、見学を強めに勧めた。齋藤（2013）は受動型不登校の治療目標は「子どもが親離れを実現できるまで育つのを上手に待つ事」とし、「治療者は子どもの停滞には時間の中で気が熟すのを待っていて動じず、外の世界に踏み出す際の逡巡にはタイミングよく背中を押してやるという、二つの機能を果たす必要がある」と述べている。SCのこの時の対応はこの2つ目の機能を果たしたと言える。

第二期になると、やや周囲に流されるような形で外との交流が増えていった。遠足をめぐっ

て、「行きたいけど行きたくない」と述べた言葉の裏には、親から自立したいけれどしたくないというAの本質的な思春期の葛藤が表現されていたと考えられる。それを表出できたことはAが思春期の課題に向き合い始めたことを示唆していると思われる。前述したように前思春期の子どもたちは密接した同世代との仲間関係に没頭することで親から自立を推し進める。Aの場合はCという仲間の助けが葛藤を乗り越える力となった。AはCとの関係を深めていく一方でゆっくりと他の子供たちとも交流を始めた。それはこれまでの受け身的、回避的というAの対人関係の持ち方とは違う、能動的な関わりの形であった。そんなAの変化に影響されたかのように、家族も変化を見せた。Bと祖父がそれぞれ仕事に出る機会を持ち、外の世界と交流を始めた。時間が止まったかのようなAの家族が動き出したと感じた瞬間であった。

第三期になると、A一家は新しい家に引っ越した。その家は祖父母世代とA親子世代、また、AとBをしっかり分けた部屋割りとなっていた。混然としていたA一家の中に物理的かつ心理的な境界が引かれたと感じた。その頃から、AはCに教えられたバンド、BUMP OF CHICKENに傾倒していく。BUMP OF CHICKENは「思春期の感情を歌い上げる」、ファン層の中心は10歳代半ばから20歳代（Real Sound, 2013）のバンドであった。これは現実の関係性ではないが、心理的な意味での同世代の仲間集団への没頭の関わりと言え、Aの思春期の課題の遂行を大きく助けたと考える。

第四期でAはCと喧嘩をした。SCは以前のAなら傷ついても黙っていただろうと思い、Aの怒りの表出にAの成長を感じた。一方で、唯一の同級生のつながりであるCとの仲が断絶してしまう不安も感じた。しかし、SCの不安をよそに、二人は2週間ほどで仲直りをした。Aが荒々しい集団と渡り合える力を得たと言え

るだろう。SCが家庭訪問の終了を告げた際のAは「中学生だしね」と述べた。また、自分のペースでやっていくことを「分かっている」と返した。これらの言葉からは、自分はSCの助けがなくてもやっていけるといった余裕が感じられた。不登校や保健室登校を始めた自分の行動を一貫して「何となく」と表現していたが、それは受け身的で自分の葛藤や行動を言語化し見つめる力が不足していたためと考えられる。しかし、最後の言葉には自己の確立を目指すAの意思が表れていたように思われた。

3. スクールカウンセラーの役割について

SCがAの自宅を初めて家庭訪問をした際に最も強く感じたのは、大人達が無為に日々を過ごしており、将来に何の希望も見いだせないような重い空気が家庭内に漂っていることであった。A一家のように内向きに閉塞した家族は自ら外に助けを求めに行くことが非常に難しい。このような自ら積極的に援助を求める力のない家族や、動機づけのない家族に支援が届くという点で、スクールカウンセラーが子ども達の生活の場である学校に配置されていることは大きな意味がある。この事例でも学校から勧められてSCの面接や家庭訪問が実現した。学校のアクションがなければ、A家族は困難を抱えたまま、ともすればAの不登校の長期化や進学への影響など、状況が悪化しなかったとは言い切れない。また不登校の子ども達は見知らぬ他人と会うことを拒む場合も多いが、AがSCに抵抗を見せなかったのは、偶然保健室で出会っていたからである。このような出会いも学校の中に入り込むスクールカウンセラーだからこそ可能だったと言える。

ところで、斎藤(2007)は、引きこもりや不登校の解決の最初の一步に「他者との出会い」を挙げている。とりわけ思春期以降は、家族以外の有意義な「自己―対象の出会い」が生きていく上で大きな意味を持つとした。70回の家庭訪問で、SCが一貫して目標としていたこと

は、Aの知る世界の外には、広くて風通しの良い別の世界があると伝えることであった。そのため一緒に行った工作やゲームも極力違うものを持参し、Aに新しい挑戦を試みさせた。また、手作業をしながら話す話題もAの興味を拡げられる内容を意識して選んだ。SCはAにとって最初の「他者との出会い」であったと思われる。また、閉塞していたAの家庭に、SCが毎週入り込むことによって外の風を入れることができたとも思われた。長坂(2006)は、面接構造を守ることが心理面接では常識となっているが、家庭訪問ではその構造が守られにくい傾向があることを指摘し、面接構造が不明確だと、カウンセラーと子どもの自我境界があいまいになりがちで、子どもの家族の力動にも影響を受けやすいため、「週に1回、1時間、固定した部屋で対象は子ども」という設定を基本とすべきだと主張している。この事例では、SCの勤務契約が年間35回あること、出勤曜日が固定していたこと、SCが面接予約を学校の授業時間にあわせていたことから、週1回、1回約45分という面接構造が初回から提示され、それが最後まで守られた。それは安定した枠組みをこの家庭訪問過程に与えたと言える。そのため、AとSCは必要以上に近づかず、SCは「他者」としてだけでなく、「安定した他者」としてAの前に存在し続けられた。家族との境界があいまいであったAにとって、一貫した枠組みの中で出会える「安定した他者」の存在は、自己の確立を目指す思春期の歩みを後押ししたと考える。教員は沢山の子どもを同時に見なければならない上、勉強を教え、成績をつけるという役割も担っており、子どもと安定した構造でかわることが難しい。週に一度、確実に現れるスクールカウンセラーは子どもにとって適度な距離を保つ安定した他者になりえる。それはまたスクールカウンセラーならではの役割だと言える。

引用文献

- 本多早由里(2014). 不登校を通して“本当の自分”を育んだ中学生女子との面接過程. 心理臨床学研究, **32**(2), 204-214.
- 岩倉 拓(2003). スクールカウンセラーの訪問相談 —不登校の男子中学生の3事例の検討から. 心理臨床学研究, **20**(6), 568-579.
- 文部科学省(2003). 不登校への対応の在り方について. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20030516001/t20030516001.html.
- 文部科学省(2018). 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(確定値). http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/__icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401595_002_1.pdf.
- 長坂正文(2006). 不登校への訪問面接の構造に関する検討-近年の事例と自験例の比較を通して. 心理臨床学研究, **23**(6), 660-670.
- 小野昌彦(2017). 不登校の本質：不登校問題で悩める保護者の皆さんのために. 風間書房.
- Real Sound(2013). なぜBUMPは「国民的バンド」になれないのか. http://realsound.jp/2013/07/bump_2.html.
- 齋藤万比古(監修)(2013). ひきこもり不登校から抜けだす!. 日東書院.
- 齋藤万比古(2016). 増補 不登校の児童・思春期精神医学. 金剛出版.
- 斎藤 環(2007). ひきこもりはなぜ「治る」のか? —精神分析的アプローチ. 中央法規出版.
- 田嶋誠一(2001). 不登校引きこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点. 臨床心理学, **1**(2), 202-214.
- 滝川一廣(2017). 子どものための精神医学. 医学書院.
- 徳田仁子(2015). スクールカウンセラーの不登校対策：子どもたちといかに繋がっていくか. 臨床心理学, **15**(2), 218-223.